

## 2. 随 想

### 渡る世間に鬼はなし？

医学部附属原爆被災学術資料センター 中 村 剛

専門は？、と聞かれたら、医療情報統計数学です”と答える。たいがいの人はキョトンとした顔をする。煙に巻くのである。学部ゼミでは位相数学（ゴム板上の幾何学）を専攻し大学院では微分位相数学の教授に就いたが、この教授は既に多くの弟子を送り出した後で、もう位相で飯は食えん。ワシの弟子になるなら計算機数学しか許さん”と言いイリノイ大学から仕入れてきたばかりの非同期回路理論の文献をポンと置いた。今更こんな下等な数学をやるくらいなら2年間遊んでIBMにでも行くか（当時はひどい人手不足の時代だった）と思ったが、我が家は裕福な方ではなく、落第にでもされたら被害甚大であるから、鬼教授の言われるままに従った。半年程で渡された文献を読んでしまい、”次は何を読みましようか”と聞いたら”じゃあ論文でも書いたらどうだ、エヘン”といわれ、驚きの余りしばらくの間うつ病になってしまった。修士論文は何とかでっちあげ（その後いくつかの雑誌のレフエリー達により、改良に改良を重ねさせられ最近印刷された）、博士課程に進んだが、2年半で学部の時の指導教授により中退させられ、ここ医学部に放り出されてしまった。医学部では統計とプログラミングの知識が必要なことを着任してから知り、今まで避けていたものを勉強するハメになってしまった。逃げれば逃げる程ついてくる何とか（？）ではないが、世の中の流れの前には個人のいい加減な思惑等は容易にねじ曲げられてしまう。それから学位の為に計算数学も細々と続けるかたわら、統計学、生物数学、パターン認識、データベース、実験データの解析、臨床検査値の性質等必要と興味に応じて知識を仕入れてきた。八方破れ寸前におりながら、各分野で一応論文を仕上げたのも当資料センター主任岡島教授の力と同時に、一緒になり大規模データベースを構成し、独自の研究成果を上げる為に、なりふり構わず煩わしい問題や勉強に取り組んで来た教室員の力でもあり、又この事業に対する周囲からの有難い激励のお陰でもある。今後は医療情報統計プログラマー（これも良く分らない？）を養成し、臨床医学情報処理システムの実現に寄与する予定である。しかしこの思惑もあっさりとねじ曲げられる時がくるに違いない。

情報処理センターも年々充実してきており、スタッフの方々の御苦勞は多大なものと察します。大学の様に細分化された分野の人間の集合体では、今後計算機が学際的研究を創り出す原点となることが予想されるので、利用者の方々も積極的に（友人離れした）意見を出していかれることが肝要と思います。富士通も日本一のシェアを誇っているのですから、投資を惜しまず、利用者層の拡大を念頭に優れたユニークなソフトを長期計画で開発していかれることを希望します。